

## 遠回りの道

### [聖書]出エジプト記13章17～22節

さて、ファラオが民を去らせたとき、神は彼らをペリシテ街道には導かれなかった。それは近道であったが、民が戦わねばならぬことを知って後悔し、エジプトに帰ろうとするかもしれない、と思われたからである。神は民を、葦の海に通じる荒れ野の道に迂回させられた。イスラエルの人々は、隊伍を整えてエジプトの国から上った。モーセはヨセフの骨を携えていた。ヨセフが、「神は必ずあなたたちを顧みられる。そのとき、わたしの骨をここから一緒に携えて上るように」と言って、イスラエルの子らに固く誓わせたからである。一行はスコトから旅立って、荒れ野の端のエタムに宿営した。主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった。

### [序] 出エジプト記を学ぶ意義

私たちは6月から旧約聖書の出エジプト記を学び始めています。今から3千数百年も昔のイスラエル民族の歴史です。どうして日本人の私たちがイスラエル民族の歴史を学ぶのでしょうか。それは神さまがイスラエル民族の中から**全世界の救い主イエス・キリスト**を誕生させたからです。そしてこのイエス・キリストを救い主と信じる信仰が、ローマ帝国全体に広まり、皇帝も信者になりました。そして世界の歴史を記述するに当たっても、キリストの誕生した年を歴史の元年とし、その前を紀元前何年、その後を紀元何年とする西暦が世界共通に用いられるようにもなりました。こうしてキリスト教信仰が西回りしてヨーロッパからアメリカ大陸へ、東周りでアジア諸国と日本にも伝えられました。

世界の全ての人を救う真の神が、イエス・キリストとなって、歴史の中にご自身を現して下さったのです。私たちはイエス・キリストに注目することで真の神を識り、イエス・キリストを救い主と信じることによって、神の救いにあずかるという信仰へと導かれました。そこで**イエス・キリストを生み出したイスラエル民族の歴史**にも注目し、神に選ばれた特別な神の民を神がどのように導かれたのかを、その歴史を通して学ぶことで神への信仰を深めていこうとするのです。

イスラエルの歴史で**最大の出来事**は、神に選ばれたアブラハムの一族が、大飢饉を逃れてエジプトに移住することによって、430年間に百数十万人の民族に成長し、奴隷扱いされているエジプトから脱出してカナンの地に戻って来る「**出エジプト**」です。ここには罪深い人間の集団を神がどのように導き救い出してくださったか、汲めども尽きない信仰の物語が集約されているのです。

### [1] モーセ 80 才の召命

エジプト国王ファラオは、国内に増え続ける異民族イスラエルを抑えつけようとして、重労働を課して虐待しました。「生まれた男の子は皆ナイル川に捨てよ」とすら命じました。神は、救いを求めるイスラエルの悲痛な叫びに答えて、ミデアンの地で羊飼ひ暮らしをしていた80才の**モーセ**をお召しに

なりました。

「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ **わたしは降って行き**、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地に彼らを導き上る。」

「見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。 **今、行きなさい。わたしはあなたを ファラオのもとに遣わす**。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」(3:7～10)

神の杖を与えられたモーセは、兄アロンと共にエジプトに戻り、絶対的な権力を誇る**国王**の前に立ち、**主なる神のご命令**として、イスラエルの民を荒野に出で礼拝させるように求めました。しかし国王には**神に対する恐れ**がありません。「**主とは一体何者なのか**。どうしてその言うことをわたしが聞いて、イスラエルの民を去らせねばならないのか」。「怠け者よ。さぼるな。もっと働け」と苛酷な労働を更に増やす命令を下しました。

イスラエルの民は悲鳴を上げてモーセに抗議しました。モーセも神に抗議しました。しかし神はモーセにお答になりました。「**今や、あなたは、わたしがファラオにすることを見るであろう。わたしの強い手**によって、ファラオはついに彼らを去らせる」(6:1)。皆さん、**神のこのお答**を私たちはしっかりと心に留めておかなければなりません。

モーセとエジプト国王との**交渉**は **10 回**も繰り返されましたが、遂にエジプトの国中の**初子が皆死ぬ**という神の裁きが下り、国王は**主なる神**に屈服しました。「さあ、わたしの民の中から出て行くがよい。あなたたちが願っていたように、行って、主に仕えるがよい。羊の群れも牛の群れも連れて行くがよい。そしてわたしをも祝福してもらいたい」(12:31～32)。

この時のイスラエルの民の総数は、20 才以上の壮年男子だけでも約 60 万人でしたから、女性たちや 20 歳以下の年少者を加えると、**約 150 万人の大集団**でしょう。また彼らと同じ様に奴隷にされていた種々雑多な人々も一行に加わって、脱出しようとしていました。その上、羊、牛などの**家畜**もおびただしい数でした。

## [2] 近道をとらず

ここからが今日の聖書の箇所です。「さて、ファラオが民を去らせたとき、神は彼らをペリシテ街道には導かれなかった。それは**近道であったが**、民が戦わねばならぬことを知って後悔し、エジプトに帰ろうとするかもしれない、と思われたからである」(13:17)。

イスラエルの民が暮していたのは、ナイル川が地中海に流れ込む河口の平野、**ラメセスの町**を中心にした一帯でしょう。そこからはカナン地方に向かって地中海沿岸にそった**ペリシテ街道**が通じていました。おおよそ**東京から京都**の手前ほどの距離でしょうから、大集団で歩いて一ヶ月もかか

りません。しかし神はその街道に行くことを許さず、**荒れ野に向かって南下する**ように導かれたのでした。これは一体どうしたことでしょうか。

「それは近道であったが、民が戦わねばならぬことを知って後悔し、エジプトに帰ろうとするかもしれない、と思われたからである」。そうです。国と国との境には、**検問所**があり、軍隊が駐在して警備に当たっています。そこへ約 150 万人ものイスラエル人大集団がぞろぞろと移動して来て、国外に出て行こうとするのですから、守備隊として簡単に通行を許可するはずがありません。

**150 万人**という人数は今の**京都市の人口**に匹敵します。皆さん、京都の住民が全員一斉に東京に向かって移動を開始した状況を想像してみてください。検問所を一日に10万人通過させるとしても15日間かかります。その上、羊や牛などのおびただしい数の家畜を連れているのです。「出国は許さぬ。これまでの居住地に**引き返せ**」と命じられたら、通せ、通さぬの戦いになり、武器を持たないイスラエルの民は逃げ帰る他ないでしょう。

そこで神は、国境守備隊の駐屯していない**荒れ野の道**を遠く南に迂回して、**葦の海の海辺**に宿営するように命じられたのでした。それは海の中に水を分けて道を造り、大集団を国外のシナイ半島に移動させるというルートです。なるほど国境検問所のある街道筋を避けて、150 万人の大集団を無事にエジプト国外に脱出させるには、遠く荒れ野を南下してから、海を渡ってシナイ半島に渡るしかありません。しかし海を渡るには船が必要だと言うところで、私たち人間の思考は挫折してしまいます。

しかし神は、蛙、ぶよ、あぶ、疫病、腫物、雹、いなご、暗闇等の災害にはくじけなかった国王を、エジプト中の**初子が皆死ぬ**という厳しい裁きを下す**強い手**をもって、屈服させてしまわれた**全能の主なる神**です。エジプト脱出に際しても、激しい風をもって海の水を押し返して、大集団を全員向こう岸に渡らせてしまわれたのでした。

### [3] ヨセフの骨を携えて

次に 19 節をご覧ください。「モーセは**ヨセフの骨**を携えていた」とあります。**ヨセフ**は、イスラエル三代目の始祖ヤコブの 11 番目の息子です。父ヤコブに特別に愛されたので 10 人の兄たちに妬まれて、奴隷商人に売り飛ばされ、エジプト国王の侍従長の家の奴隷にされてしまいました。しかし夢を解く霊力を神から与えられていた彼は、エジプト国王が夢で示された世界を襲う大飢饉の予告を読み取りました。そこでユダヤ人でありながら、大飢饉対策のトップに抜擢されて、**エジプトを大国にする功績**を上げた人物です。

**ヨセフ**はカナンから食糧を求めてやってきた兄たちと再会し、父ヤコブを説得してエジプトに移住させました。そして**僅か 70 人**だった一族を 430 年後に 150 万人の民族大集団に成長させた**第一の功労者**です。モーセはそのヨセフの遺骨を大切に携えてカナンへの旅を始めたのでした。

モーセは、神がご自分の選んだ民をどのように愛し、守りお育てになったかを、ヨセフの生涯を通して改めて強く自覚したことでしょう。そして、その全能なる神が今、自分たちをカナンの地に導いて下さって居るといふ信仰を強く抱いて、神の指示に従い、常識では考えられない海で行き止まりとなる荒れ野の道を南に進んで行ったのではないのでしょうか。

私たちが人生の旅路を進んでいます。なるべく苦勞の少ない近い道を選ぼうとしがちです。私たちは、自分の人生の目的地をどうやって決めたのでしょうか。またその目的地への道筋をどのように決めて進んでいるのでしょうか。イスラエルがエジプトを脱出して目指しているのは、神が先祖アブラハムに与えたカナンの地に戻ることでした。エジプト人の意志に引き回されて生きていく奴隷生活ではなく、神が備えてくださった地で、神の民として生きていく原点に戻ることでした。では私たちの目指すべき目的地はどこでしょうか。私たちが先ず人生の目的地を、信仰をもってしっかりと定めなければなりません。モーセは、神の導きに従って、遠回りの道、しかも海で行き止まりになる荒れ野の道を進みました。しかし主なる神が先立って進み、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって導いて下さいました。神が私たちと共にいて下さり、導いて下さる道を進むことが、何よりも大切なのですね。

モーセにこの勇氣ある決断を与えたのが先祖のヨセフでした。ヨセフは「神は必ずあなたたちを顧みられる。そのとき、わたしの骨をここから一緒に携えて上るように」と言って、イスラエルの子に固く誓わせて死にました。そして遺骨に込められたヨセフの信仰の生涯が、400年後のモーセに、エジプトの奴隷にされていた150万のイスラエルを、約束の地カナンに導く出エジプトを見事に成し遂げさせたのでした。信仰の継承——これは本当に大切ですね。

## [結] 礼拝を守る恵み

私たちが週の初めの日曜日に、こうして礼拝を守っています。私たちの歩んでいる人生の旅路が、正しい目的地を目指しているかを反省する時です。また新しい一週間の歩みが、神の導きに従うものであるように、信仰を新たにする時です。私たちの一步一步を、雲の柱、火の柱の導きのもとに進めることが出来るように、全能の主なる神に祈り求めて、出発する時としたいものです。

また私たちの信仰を、私たち一代で終わらせることなく、次の世代、その次の世代へと継承させていきたいものです。モーセは400年前の先祖ヨセフの遺骨を携えて、エジプトからカナンの地への民族大移動の旅を成し遂げました。荒れ野に向かう遠回りの道を進んで、約束の地に達したのでした。

お祈りします： 神さま、貴方は歴史の先の先まで見通しながら、私たちを導き、本当の祝福を与えて下さる全能の主なる神さまであることを感謝します。私たちの人生の旅路においても、それが海で行き止まりとなる荒れ野の道、遠回りの道であろうと、あなたが共にいて導いて下さる道を進む者にして下さい。またヨセフのように、私たちの信仰を後の世代に受け継がせる者にして下さい。 主の御名によって祈ります。 アーメン